

氏名	岸 隆
学位の種類	博士 (医学)
学位記番号	甲第680号
学位授与年月日	令和8年3月19日
審査委員	主査 教授 大嶋 直樹
	副査 教授 渡部 広明
	副査 准教授 柴垣 広太郎

論文審査の結果の要旨

幽門側胃切除 (distal gastrectomy : DG) 後の残胃は、後胃動脈、短胃動脈、左下横隔動脈 (left inferior phrenic artery : LIPA)、食道動脈などにより血流が維持されている。一方、膵体尾部切除 (distal pancreatectomy : DP) は脾臓摘出を伴うことが多く、DG後に施行した場合、脾動脈系血流の遮断により残胃虚血壊死 (ischemic necrosis of the remnant stomach : INS) を来す危険性が指摘されてきた。そのため、INSを危惧して予防的残胃全摘が選択される症例も存在していたが、DG後DPにおけるINSの発生率やリスク因子を大規模症例で検討した報告はなかった。

本研究では、日本膵切研究会の支援のもと、全国175施設を対象とした多施設後方視的アンケート調査を実施し、2009年から2019年にDG後DPを施行した414例のうち、残胃温存が試みられた364例を解析対象とした。INSは4.7% (17例) に認められ、うち15例は術中に、2例は術後に診断された。多変量解析の結果、術前因子として「胃癌に対するDGの既往」および「膵癌に対するDP」が独立したリスク因子であり、術中因子としては「LIPA切離」が唯一の独立した高リスク因子として同定された。

本研究は、DG後DPにおけるINSを全国規模で解析した初の報告であり、LIPA温存の重要性を明確に示した点で学術的価値が高い。後方視的研究である点やINS症例数が限られる点は本研究の制約であるが、DG後DPにおいては、術前画像によるLIPA走行の把握と、術中の慎重な温存操作が、残胃温存を可能とする重要な戦略であることを示唆しており、今後の外科治療方針決定に有用な知見を提供するものと評価された。